The Age of Innocence は男性中心社会の批判なのか

――“safe” から探る Edith Wharton の眼差し――

文学部文学科英米文学専攻

佐藤（さとう）　千寛（ちひろ）

はじめに

Edith Wharton（1862-1937）は *The Age of Innocence*（1920）によって、女性として初めてピューリッツァー賞を受賞した。この作品は女性である Wharton が、Newland Archer という男性の語り手を通して男性中心社会を批判していると評価されている。

例えば河島弘美や佐々木真理を始めとする先行研究を見てみると、作品の主眼は男性中心社会の批判だという見方が根底にある。[1] その上で作品の舞台が 1870 年代のオールド・ニューヨークである点と Wharton 自身がニューヨークの上流家庭出身という点から、過ぎ去った時代を懐かしむ回顧録的な側面も持ち合わせているのではないかという解釈もある。つまり *The Age of Innocence* に社会批判を読み取ることは当然とも言えるのだ。

しかし本研究では多くの先行研究が述べている *The Age of Innocence* が男性中心社会の批判であるという考えに疑問を投げかけたい。確かに作品には男性や男性中心社会の批判と読める部分が多数見られる。しかし最終章で 26 年後の Newland が直面している社会の変容は、移民の流入や女性解放運動など社会が大きく変わっていった Wharton が生きた時代にも当てはまる。[2] この点から Wharton が自分自身の状況を Newland に重ね合わせたと考えることもできるのではないだろうか。

そもそも *The Age of Innocence* に既存の社会への批判が読み取れる理由は大きく分けて 2 つある。まず、婚約者であり後の妻となる May Welland に対する Newland の眼差しである。彼は長い間ヨーロッパで結婚生活を送っていた May のいとこ Ellen Olenska の離婚問題に触れたことをきっかけに彼女に惹かれ始める。彼は Ellen を気にかけるようになってから、May に対して作られた “innocence” を見出している。女性を特定の枠にはめて捉える男性を、女性である Wharton が描いている点は、作者が男性から女性に向けられる態度や考え方を暗に批判していると捉えることができる。

そして Ellen に惹かれる Newland に対する May の振る舞いにも、父権制社会への批判を読み取ることができる。Newland は May との婚約を解消して Ellen と共にヨーロッパへ脱出することを望むが、May から結婚式の日取りが早まったことを聞かされて結婚する。結婚後に Ellen と再会した際も、Newland は彼女に惹かれるが May から妊娠を告げられ、結局オールド・ニューヨークで結婚生活を送ることになる。つまり May は他の女性に惹かれる Newland を自分の元に留めることに成功したのだ。彼女の姿は、表向きは夫の庇護下にいる女性である。しかし Newland が抱いた May の見方を大きく裏切っている点で、Newland という男性よりも一枚上手のしたたかな女性像を思わせる。

だが最終章に着目することで異なる読みが可能になる。最終章である第 34 章は第 33 章から 26 年経った Newland を描いている。26 年の間に何が起こったのかは Newland の回想によってのみ語られ、狭苦しい社交界は消滅している。26 年前オールド・ニューヨークの慣習から抜け出しきれなかった Newland は羽を伸ばして生活しているかと思いきや、時代の変化についていけずに置いて行かれている様子が描かれている。

これはかつて先進性を自負していた男性の惨めな姿を描くことで男性を批判しているとも捉えられる。しかし Newland が社会の変容に直面している姿は、変化を伴う時代に生きた

Wharton と共通している。つまり Wharton にとっての Newland は批判の対象という解釈だけでなく、自分を重ねた存在と読むこともできるのだ。

さらに着目したいのは社会の変化に置いて行かれた Newland が May に救いを見出すという点である。主人公が今いる社会からの脱出を試みるが断念し、結局その社会の人物に救われるという結末は 1917 年に発表された *Summer* にも見られる。

The Age of Innocence の前に発表されたこの作品の主人公は Charity Royall という少女である。ニューイングランドの片田舎ノースドーマーを舞台とし、彼女の周りを取り巻く人物として養父の Mr. Royall と青年 Lucius Harney という二人の男性が登場する。Charity は Mr. Royall との田舎暮らしに嫌気が差している中で Harney と出会い惹かれていく。だが Harney は他の女性と婚約し、彼との子を授かった Charity は途方に暮れる。未婚で妊娠し行き場を無くした Charity は Mr. Royall といることが "safe"「安心」だと悟る。この結末はオールド・ニューヨークの象徴的な女性 May に救われる Newland と非常に似ている。さらに "safe" は晩年の May が Newland に見出していたものでもある。

つまり *The Age of Innocence* と *Summer* は筋書きに加えて使われている言葉にも共通点が見られるのである。この点を踏まえることで、*The Age of Innocence* の新たな解釈を提示することができるのではないだろうか。よって本研究では *The Age of Innocence* の主眼は何なのかを考えるにあたり、作品の最終章と *Summer* に共通して用いられる "safe" に着目する。さらに *The Age of Innocence* と同様に、時代が進んだことによる社会の変化というテーマが見出せる晩年の作品 "Roman Fever"（1934）も踏まえ、Wharton が *The Age of Innocence* において描きたかったものは何なのか、彼女独自の眼差しを明らかにする。

本研究は *The Age of Innocence* の主眼を男性中心社会への批判と捉えることからの脱却を試みたい。なぜなら先行研究では、Wharton が上流階級出身の女性であるという出自と性別にのみ目が向けられ、それが作品に結び付けられているように感じられるからである。これまでの解釈は、作品に既存の男性中心社会に対する批判的な眼差しまたは Wharton 自身の懐古的な眼差しを見出すという 2 つの見方に分けられる。例えば亀井俊介は Wharton が社交界を批判しながらも、彼女自身はその伝統の中にとどまっていた点について「そこら辺がウォートンの問題なんでしょうね」（226）と述べている。しかし問題を指摘するのみで、Wharton が何を描きたかったのかは述べられていない。[3]

このように彼女の出自と性別が作品と強く結びついた結果、これまでの *The Age of Innocence* の解釈が構築されていると考えられる。しかし本研究では Wharton の作品そのものに加えて、彼女がどんな時代にどのように生きたのかという点に目を向ける。そして *The Age of Innocence* が決して単なる既存の社会への批判や回顧録ではないことを論じ、作品の新たな読み方を提示したい。こうした姿勢は Wharton だけでなくこれまで「女性作家」としてカテゴリー化されてきた、他の女性作家の作品の価値や評価の再考にも繋がるはずである。

第１章　*The Age of Innocence*

第１節　オールド・ニューヨークに対する当初の Newland の態度

The Age of Innocence では Newland が因習的なニューヨーク社交界を批判し先進性を自負している人物として描かれているが、彼は最初から社交界の慣習に疑問を抱いていたわけではない。第５章で Ellen を擁護する立場を取るまでは社交界のしきたりを受け入れていたし、同じ価値観を持つ May のことを好ましく思っていた。Ellen を庇ったことをきっかけに、May に対してオールド・ニューヨークを象徴する人工的な “innocence” を持つ女性だと感じるようになったのである。したがって *The Age of Innocence* で描かれているものが何かを明らかにするためには Newland の心情の変化を追うことが非常に重要である。まず第１章でオペラを鑑賞している場面からは、彼がオールド・ニューヨークのしきたりを当然と思っていることが読み取れる。

> She sang, of course, “M’ama!” and not “he loves me,” since an unalterable and unquestioned law of the musical world required that the German text of French operas sung by Swedish artists should be translated into Italian for the clearer understanding of English-speaking audiences. This seemed as natural to Newland Archer as all the other conventions on which his life was moulded: such as the duty of using two silver-backed brushes with his monogram in blue enamel to part his hair, and of never appearing in society without a flower (preferably a gardenia) in his buttonhole. (4) [4]
>
> もちろんプリマドンナは「マーマ」とイタリア語で歌っていた。スウェーデン人の歌手がフランスオペラの曲をドイツ語で歌う場合でも、英語話者の聴衆に分かりやすくするためにイタリア語にしなくてはならないのが、音楽の世界の変わらない広く受け入れられた決まりであった。ニューランド・アーチャーにとってはこれも、自らの生活を形成しているその他すべてのしきたりと同様に当然のことに思えた。たとえば、髪を分けるのにブルーのエナメルで自分のイニシャルを入れた二本の銀のブラシをつかわなければならない、人前に出る時には必ず上着の襟のフラワーホールに（できればクチナシの）花を挿さなければならない、といったことである。

“the musical world”「音楽の世界」では、たとえ原曲がドイツ語であっても聴衆のためにイタリア語で歌われる。この決まりは “unalterable”「変わらない」だけでなく「変えられない」とも読み取れることに加え、“unquestioned” は「当たり前に受け入れられた」という意味の他に「“question”「疑問」を抱かない」様子を指しているとも捉えられる。こうした表現は決まりきった慣習で形成されたオールド・ニューヨークに重ねることができる。

Newland はこれらの “an […] law of the musical world”「音楽の世界の（中略）決まり」を “natural”「当たり前」と考えている。それは “all the other conventions on which his life was moulded”「自らの生活を形成しているその他すべてのしきたり」と同じように「当た

り前」なのだが、ここで使われている “moulded” という単語に着目したい。*Oxford English Dictionary* では “mould” を次のように定義している。

> To shape (fluid or plastic matter) into a required shape by pouring or pressing into a hollow form or matrix; to press or cast in or into a particular form. Also figurative.

“required shape”「必要な形」に形成するのが “mould” だということが分かる。ここから、オールド・ニューヨークのしきたりは、それを当たり前に受け入れるように当人の価値観を “mould”「形成する」役割があるのではないだろうか。

オールド・ニューヨークによって形作られた価値観を持つ Newland は、第 1 章において劇場に現れた Ellen に対して、周囲の人と同じように消極的な印象を持つ。

> How this miracle of fire and ice was to be created, and to sustain itself in a harsh world, he had never taken the time to think out; […] He instinctively felt that in this respect it would be troublesome—and also rather bad form—to strike out for himself. (6-7)
>
> まるで炎と氷のような奇跡がどのようにつくられ苛酷な世界でどのように維持されるのか、彼はじっくりと考えたことはなかった。(中略) この点で自分だけ別の道を取るのは厄介だし不作法だと直感的に感じた。

“troublesome”「厄介な」という言葉からは Newland 自身が、わざわざ他人と異なる考えを抱くことに消極的であることが読み取れる。“and also rather bad form”「不作法である」つまり社会の価値観にそぐわないという理由付けをすることによって、自分の考えを正当化している。しかし “instinctively”「直観的に」という単語は二つの意味で解釈することが可能である。一つ目は、社交界に生きる人間としての規範に従うべきだという直観である。そして二つ目は、婚約者を持つ一人の男性としての規範意識である。つまり Newland は最初から Ellen に惹かれたり社交界の慣習に疑問を抱いたりしていたのではなく、社交界の慣習と息苦しさの間で揺れ動いていた。

このような心の揺らぎがありながらも彼はしばらくオールド・ニューヨークの価値観に沿った態度を取っている。例えば第 3 章を見てみたい。Newland と May の会話において Ellen が舞踏会に現れなかったことが話題になった場面である。Ellen の抱える離婚問題に触れない May のことを好意的に受け止めている。

> “Oh, well—” said Archer with happy indifference. Nothing about his betrothed pleased him more than her resolute determination to carry to its utmost limit that ritual of ignoring the “unpleasant” in which they had both been brought up. (21)
>
> 「ああ、そうでしたか」とニューランドは無頓着な返事に満足した気持ちを込めた。「不愉快なこと」を無視するという慣習を守り抜こうとする彼女の決意より嬉しいものはなかったからだ。メイもニューランドもそのように育ったのである。

Newland は May が “ritual”「慣習」を守ろうとする態度に満足している。そして “they had both been brought up”「メイもニューランドもそのように育った」という言葉からは同じ価値観を持つ者同士の居心地の良さを感じていることが読み取れる。

第 2 節　Newland の考え方の変化

ここまでの Newland はオールド・ニューヨークの慣習の中で生活することに特段の疑問や息苦しさをいだいていない。では彼の考えが変化するきっかけは何だったのだろうか。それは第 5 章の晩餐会において、周囲の人々が Ellen に対する非難を強める場面である。皆が彼女に対して批判的な意見を述べ、夫との離婚を望んでいることについて当然認めない。Newland はこの時 “Women ought to be free—as free as we are”（34）「女性は自由であるべきです。我々男性と同じように」と、ニューヨーク社交界の考え方から逸脱した意見を述べる。

続く第 6 章から May に対する Newland の眼差しが大きく変化する。第 1 章では “He meant her（thanks to enlightening companionship）to develop a social tact and readinesss of wit”（6）「（夫である自分の啓蒙によって）社会的才と機転を身につけてほしい」というように、May を “enlight”「啓蒙する」役割を自負していた。ところが Ellen を擁護した後は May が Ellen の対極にいる女性だと感じるようになる。

> As he dropped into his armchair near the fire his eyes rested on a large photograph of May Welland, […] With a new sense of awe he looked at the frank forehead, serious eyes and gay innocent mouth of the young creature whose soul’s custodian he was to be. That terrifying product of the social system he belonged to and believed in, the young girl who knew nothing and expected everything, […]（35）
>
> 暖炉の近くのひじ掛け椅子に腰を下ろすと、メイ・ウェランドの大きな写真に目が向いた。（中略）メイの正直そうな額、まっすぐな目、無垢で明るい口元を、ニューランドは新しい畏怖の念で見た。自分は将来、この人の魂の保護者になるのである。彼が属しその価値を信じている社会組織の恐るべき産物であるこの娘は、何も知らずにすべてを待っている。

第 3 章ではオールド・ニューヨークの価値観に沿った行動をする May に好意的だったが、その考えが変化する。彼女を “That terrifying product”「恐るべき産物」というように一人の人間ではなく産物として捉えている。また、その産物を作り出したのは “the social system”「社会組織」とされている。Newland はここまでの章において、社交界のことを述べる際は、“New York society”「ニューヨーク社交界」という言葉を使っていた。だがここでは “society”「社会」として捉えられなくなっているのではないだろうか。実際 *Oxford English Dictionary* では “A set of interdependent relationships, customs, and institutions that constitute a society.” と定義されていて、“social system” は “society” の中に存在するものだということが分かる。したがって Newland はオールド・ニューヨークのことを社会そ

のものではなく、社会に内包されたものとして捉えていると考えられる。

Newland は May に対する見方が変化したことでオールド・ニューヨークに対しても批判的になっていく。第 10 章では May が何も知らない女性であることを “It would presently be his task to take the bandage from this young woman’s eyes, and bid her look forth on the world.” (67)「この若い女性から目隠しを外し、世界を見るように命じるのが彼の務めだと思われた」と表現し、“enlight”「啓蒙する」という役割から変化している。そして “But how many generations of the women who had gone to her making had descended bandaged to the family vault? ” (67)「でもこれまで何人の女性たちが目隠しをされたまま一族の墓に入っていっただろう ?」と May のみならずオールド・ニューヨークの他の女性たちまで視野が広がっている。つまり May に対する眼差しの変化がオールド・ニューヨークという「社会組織」への批判につながるのだ。

Newland は May について “What if, […] they could look out blankly at blankness?” (67)「その目がただ虚ろに虚空を眺めるだけだとしたら ?」と述べ、彼女の目には何も映っていないと捉えている。だがその考えは誤りだということが後に明らかになる。それは第 33 章の最後に May から妊娠したことを告げられる場面である。これによって Newland は Ellen と共にオールド・ニューヨークを脱出するという夢を捨てざるを得なくなった。しかも、May は妊娠したことを既に Ellen に伝えていた。

> “Ah—” said Archer, his heart stopping.
>
> He felt that his wife was watching him intently. “Did you *mind* my telling her first, Newland?”
>
> “Mind? Why should I?” He made a last effort to collect himself. “But that was a fortnight ago, wasn’t it? I thought you said you weren’t sure till today.”
>
> Her colour burned deeper, but she held his gaze. “No; I wasn’t sure then—but I told her I was. And you see I was right!” she exclaimed, her blue eyes wet with victory. (283)
>
> 「ああ」ニューランドは心臓が止まりそうだった。
>
> 彼はメイに見つめられていると感じた。「エレンに最初に言ったこと、**気になるの？**」
>
> 「気になる？なんでだい？」彼は自分を落ち着かせようと気力を振り絞った。「でも妊娠したことは今日分かったのだろう？」
>
> 彼女の顔色がさらに火照ったが、平静を保っていた。「そうよ。あのときははっきりとはわからなかった。―でもそうだと思って彼女には言ったの。そして実際そうだったでしょう！」彼女はそう興奮気味に言った。青い目は勝利で濡れていた。

May の “Did you *mind* my telling her first, Newland?”「エレンに最初に言ったこと、**気になるの？**」という言葉では “*mind*” が強調されている。これは単に妊娠したことを夫に一番に伝えなかったことを Newland が気にしているのか尋ねているというよりも、Ellen に先に言ってはいけない不都合なことがあるのか問うているようである。そしてまだ妊娠したことが確定していないのにも関わらず Ellen にそのことを伝えていた。つまり May は Newland

が Ellen に抱いていた気持ちを分かっていたのである。

さらに “her blue eyes wet with victory”「青い目は勝利で濡れていた」という表現にも着目したい。Newland はかつて May に対して “task”「義務」を負っていると考えていた。その義務とは “bandage”「目隠し」を外すことである。だが実際は “her blue eyes”「彼女の青い目」はしっかりと Newland を見ていたのだ。

第 3 節　最終章における Newland の姿

第 33 章は May に対する眼差しが覆ったところで終わる。続く第 34 章は物語の最終章だが、ここでは 26 年後の Newland が描かれている。既に May は亡くなり、結婚を控えている息子 Dallas と Newland の対照的な姿がある。

Dallas について Melanie Dawson は “young sons have as apparent freedom to experience a level of personal fulfillment”（202）「若い息子は明らかに個人的な満足を得るための自由を持っている」と述べている。Newland が若かった時代と違い、Dallas が生きる時代では周りからの評判を気にすることなく好きなことができるようになった。

特に変化の象徴となっているのが Dallas の結婚に対する周囲の反応である。彼は Julius Beaufort の娘と結婚する。26 年前は Newland と Ellen が結ばれることは社会から許されなかったが、Dallas が結婚する時代では結婚の際の制約はない。この変化について Newland が語るのだが、彼の語りからは時代が変わったことを喜ぶ様子は見られない。

> Nothing could more clearly give the measure of the distance that the world travelled. People nowadays were too busy— busy with reforms and “movements,” with fads and fetishes and frivolities— to bother much about their neighbors. And of what account was anybody’s past, in the huge kaleidoscope where all the social atoms spun around on the same plane?（291）
>
> 世の中が変化したということをこれほどはっきりと示すものはないだろう。この頃の人間は忙しすぎる—改革、「運動」、さらには一時的流行や執着、くだらぬことにかまけて、隣人など気にしない。それに、他人の過去にどんな意味があるだろう—全ての社会的原子が同じ平面上でくるくる回っている、巨大な万華鏡のような世界で。

Newland が “People nowadays were too busy.”「この頃の人間は忙しすぎる」と語る点からは社会の変化に伴う人々の変化を痛感していることが読み取れるが、彼が “People nowadays”「この頃の人間」の様子をどのように受け止めているか考えたい。続く語りを見ると彼は決して好意的な評価をしていないことが読み取れる。“with reforms and ‘movements’”「改革や『運動』」とは、26 年前の Newland が望んでいたことだと考えられるが、それを称賛する気持ちは読み取れない。さらに “with fads and fetishes and frivolities”「一時的な流行や執着、くだらないこと」という表現からは Newland が “People nowadays”「近頃の人々」を低俗だという印象を抱いていると考えられる。こうした語りから 26 年前の先進的な人物像と、実際に社会の変化を目の当たりにして伝統の消滅を嘆く保守的な人物像の対比が際立つ。

さらに “And of what account was anybody’s past”「それに、他人の過去にどんな意味が

あるだろう」という言葉にも着目したい。26年前のNewlandや社会が重視していた価値がそれほど重視されなくなったことに気づいたのではないだろうか。かつてのニューヨーク社交界では人々の過去が重視され、他者の過去の行いを全て記憶している人物がいた。しかし現在はそうではないからこそ、DallasはFannyと結婚できるのである。かつてのNewlandは過去の行いに囚われることに嫌気が差していた。だが社交界が価値を見出していたものが取るに足らないものになってしまった現在を、実際に目の当たりにしたのである。

また、続く"in the huge kaleidoscope where all the social atoms spun around on the same plane?"「すべての社会的原子が同じ平面上でくるくると回っている巨大な万華鏡のような世界で」という言葉からも変化を肯定しきれない心情が読み取れる。ここでの表現は第6章におけるかつてのオールド・ニューヨークの描写と比べることができる。

> The New York of Newland Archer's day was a small and slippery pyramid, in which, as yet, hardly a fissure had been made or a foothold gained. At its base was a firm foundation of what Mrs. Archer called "plain people"; an honourable but obscure majority of respectable families who (as in the case of the Spicers or the Leffertses or the Jacksons) had been raised above their level by marriage with one of the ruling clans. (239)
>
> ニューランド・アーチャーの時代のニューヨークは小さくて滑りやすいピラミッドで、割れ目や足を掛ける部分はまだほとんどなかった。ピラミッドの土台にあるのは、アーチャー夫人が「庶民」と呼ぶしっかりとした基盤だった。その土台は、地位のある家柄のうち大部分を占める、立派だが家名はないにも等しい一族たちで、（スパイサー家、レファーツ家、ジャクソン家などがそうであるように）名門の一族との結婚によって上位レベルへと上がった家である。

"a small and slippery pyramid"「小さくて滑りやすいピラミッド」は、26年後の"on the same plane"「同じ平面上」に人々が存在する社会とは対照的である。オールド・ニューヨークは家柄に重きが置かれていることが読み取れるが、時が過ぎて階級が消滅し"social atoms"「社会的原子」として皆同質の存在とみなされるようになった。

こうした描写は、"the huge kaleidoscope"「巨大な万華鏡」に例えられる世界はどのような世界なのかを考える際の手がかりになる。"kaleidoscope"は*Oxford English Dictionary*で次のように定義されている。

> A constantly changing group of bright colours or coloured objects; anything which exhibits a succession of shifting phases.

"constantly changing group of bright colors or colored objects"「常に変化している輝く色や物体のまとまり」とは万華鏡を構成する色彩のことだが、これを社会に当てはめるとどうだろうか。オールド・ニューヨークには家柄による明確な序列があり、それは変化するものではなかった。つまり頂点に君臨する"bright colors or colored objects"「輝く色や物体の

まとまり」はずっと同じ家だったのだ。しかし26年後には皆“social atoms”「社会的原子」となり、“the same plane”「同じ平面上」にいるため、家柄の序列はない。“bright colors or colored objects”「輝く色や物体のまとまり」は常に変化すると言えよう。

このように社会の変化を受け入れ切れないNewlandは、Dallasと共に訪れているパリの街並みを眺めているうちに、“he felt shy, old-fashioned, inadequate”（292）「自分が内気で力不足な人間と感じた」と語る。26年前は先進的な男性として社会を見ていた彼が実際の社会の変容に直面した時、社会に置いて行かれてしまったのだ。そんな自分のことを“a mere grey speck of a man compared with the ruthless magnificent fellow he had dreamed of being....”（292）「かつて自分がなりたいと夢に見た堂々たる人物に比べると小さな灰色の点に過ぎない…。」と感じている。こうして惨めさを抱いたNewlandに関して救いようがないまま物語は終わるようにも見えるが、生前MayがDallasに遺していた言葉に救われる。次の場面はDallasがそのことをNewlandに打ち明ける場面である。

> “Yes: the day before she died. […] She said she knew we were safe with you, and always would be, because once, when she asked you to, you'd given up the thing you most wanted.”（293）
>
> 「そう。お母さんが亡くなる前の日のことだけど。（中略）お父さんといれば僕たちは安心だし、これからもずっと大丈夫だと確信していると言われました。昔お母さんが頼んだら、お父さんは一番欲しいものを諦めてくれたから、だって」

これをきっかけにNewlandにとってのMayは“some one had guessed and pitied”（294）「自分の気持ちを推し量り同情してくれた人」になる。彼女は決して無知な女性だったのではなく、今いる世界で生きていくためには自らがどのような女性であることを求められているのか、どのような行動を求められているのかといった規範を理解していたのである。

つまり最終的にNewlandは社交界が作り上げた産物のように思えていたMayに救われたのである。26年前は先進的な男性を自負し自由な考えをもつEllenに惹かれていた。しかし実際に社会が変化したとき、彼はその変化を受け入れることはできなかった。そのような彼を救ったのは典型的なオールド・ニューヨークの女性であるMayだったのだ。そして物語の最後にDallasと共にEllenの自宅を訪れたNewlandは、彼女に会うことをやめる。

この結末に着目したい。既に社交界は消滅しMayも亡くなっているのだから、NewlandはEllenに会って26年前には叶わなかった関係を結ぶことも可能だったはずだ。それにも関わらずEllenと会わなかったのは、Newlandにとっての救いがオールド・ニューヨークにあったということを示していると言える。

ここで重要なのはかつてのNewlandがEllenと共にオールド・ニューヨークを脱出することを望んでいたのにもかかわらず、年月を経てMayに救われEllenに会うことをやめるという点である。今いる社会からの脱出を試みるが断念し、社会の価値観を象徴するような人物に救われるという筋書きはWhartonの1917年の作品*Summer*にも見られる。したがってこの筋書きはWhartonの中で何かしらの意味を持っていたと考えられる。次章ではこの筋書きが表すものは何なのか考えてみたい。

第２章　*Summer*

第１節　*The Age of Innocence* との主な共通点と相違点

Summer の主人公である Charity は、ノースドーマーを訪れた青年 Harney の姿を目にしたことをきっかけにネトルトンを思い出す。彼女はかつて牧師の Mr. Miles の教育の一環としてネトルトンに連れて行ってもらったことがある。そこでは “[...] experienced railway-travel, looked into shops with plate-glass fronts, tasted cocoanut pie, sat in a theatre” (5)[5]「鉄道の旅を経験し、ガラス張りの店を覗き、ココナッツパイを味わった。そして劇場にも行」き、様々な経験を通して “initiation” (5)「社会入門」を果たした。ノースドーマーとは別の世界を知ったことで自らが属する社会を “[...] abandoned of men, left apart by railway, trolley, telegraph, and all the forces that link life to life in modern communities.” (5)「人々に見捨てられ、鉄道や路面電車、電信など近代的な地域社会の生活と結びつける全ての便宜から見放された」と捉えている。この描写は鉄道を利用したネトルトンへの旅とは対照的である。ここまでの Charity の様子はオールド・ニューヨークに不満を覚える Newland と重なる部分がある。

ただし Charity が嫌悪感を抱くのはノースドーマーそのものというよりも Mr. Royall との生活である。作品では彼女が Mr. Royall に反発する場面が多く描かれている。これは彼との生活をやめたいからである。ネトルトンや「山」の何かに惹かれているのではなくとにかく彼の元を離れたいのだと思われる。実際 Charity は第５章で “Charity had, in truth, never felt any desire to visit her birthplace. She did not care to have it known that she was of the Mountain, [...]” (36)「チャリティは実のところ、自分の出生地を訪ねたいと思ったことは一度もなかった。「山」生まれであることを知られたくなかったので（後略）」と述べ、「山」に特段の愛着は見られない。

この点は Newland がオールド・ニューヨークに関して慣習や狭苦しさという具体的な部分に疑問を抱いていた様子とは異なる。確かに Charity は田舎であるノースドーマーを取るに足らないものと捉えているが、具体的に嫌気が差しているのは Mr. Royall との生活である。こうした相違点を踏まえ、次節では主に Mr. Royall と Charity の関係に焦点を当てる。

第２節　Mr. Royall と Charity の関係

Charity が Mr. Royall に嫌悪感を抱き始めるのは、彼が部屋に押し入ろうとしてきた時である。Charity は直前に彼が使う棚の鍵をこっそり持ち出していたため、Mr. Royall はそれを取りに来たのだ。彼は鍵が欲しいのではなく寂しいのだと訴えるが Charity は拒み続ける。この時 “the deep voice that sometimes moved her” (17)「彼女の心を動かすこともある、あの深い声」で訴えられ若干心が揺らぐが “a deep a deep disgust” (18)「心底厭わしい感情」が勝り、Mr. Royall を追い返すことに成功する。その後彼女に “the consciousness of victory” (18)「勝利の意識」が生まれたことから、Mr. Royall へ反抗することは Charity にとって非常に重要な意味を持つことが分かる。その後、図書館の司書が亡くなり Charity にとっての働き口が生まれた。彼女は図書館で司書として働き、経済的自立を目指すようになる。

Charity が働こうとしていると知った Mr. Royall はその理由を尋ねる。それに対して Charity は “Anywhere where I can earn my living. I'll try here first, and if I can't do it here I'll go somewhere else. I'll go up the Mountain if I have to.”（20）「自分のお金が稼げるならどこへでも行くわ。ここでやってみてだめだったら、他のところへ行く。必要があれば山にだって行く。」と答える。この発言は Charity はノースドーマーでの生活ではなく、Mr. Royall との生活からの脱出を望んでいることを示している。Mr. Royall から経済的自立を果たせればネトルトンや「山」といった特定の場所は問わず “anywhere”「どこでも」良いのである。

対する Mr. Royall は “I want you to marry me.”（20）「私と結婚してくれないか。」と Charity に結婚を申し込む。Charity の視点から見た Mr. Royall は “he seemed like a hideous parody of the fatherly old man she had always known”（21）「彼はチャリティが今まで父親同然と思っていた老いた男の、醜く滑稽な替え玉のように見えた」と表現され、結婚の申し込みを拒む。“How long is it since you've looked at yourself in the glass?”（21）「鏡に映る自分の姿を最後に見たのはいつ？」と言ったことに加えて “She straightened herself, insolently conscious of her youth and strength.”（21）「彼女は身体をまっすぐに伸ばして、傲慢にも自分の若さと強さを意識した。」と描写されている点からは、経済的に自立していない Charity にとって唯一彼よりも優位な点を「若さ」だと思っていることが読み取れる。その後 Charity は図書館の司書になり、家には貧しい未亡人の老女 Verena Marsh が家政婦としてやってきた。つまり Mr. Royall との生活から脱出するための第一歩を踏み出したのだ。

そして Charity の運命を左右したとも言えるのが Lucious Harney という青年である。図書館の司書を務める Charity と、ノースドーマーの建築を調査する彼は次第に距離を縮める。彼は何度も “young Harney”「青年ハーニー」と表現されていて、“the fatherly old man”「父親同然の老いた男」とされた Mr. Royal とは対照的な存在である。彼は Charity と親しくするが最後まで愛の告白はしない。その上、彼は他の女性と婚約する。Charity がそのことを知った時、彼女は既に Harney との子を授かっていた。

第 3 節　「山」に行く Charity

未婚で妊娠した Charity は男女関係に厳しい “the harsh code of the village”（155）「村の残酷な掟」から逃れ、子供を守るために「山」に行く決意を固める。苛酷な道中で偶然牧師の Mr. Miles に出会うのだが、彼は Charity の母親が危篤であるため「山」に向かおうとしていた。

牧師と共に「山」にある小屋にたどり着くと母親はすでに亡くなっていた。Charity は母親の姿から人間らしさを感じられず “like a dead dog in a ditch”（163）「犬が溝にはまって死んでいるかのよう」だと表現している。母親の姿や周りの人々の様子から「山」の悲惨さを知った Charity だがノースドーマーを離れると決めた以上、「山」にとどまることを決める。夜になり Charity はここに来たことを “tragic initiation”（170）「悲劇的な社会入門」と表現する。“initiation”「社会入門」は Charity が初めてネトルトンを訪れた時のことを表す言葉でもあり、今回の “initiation”「社会入門」が Charity にとっていかに酷なものだったの

かが読み取れる。

そしてCharityは母親が自分自身をノースドーマーにやったことについて“What mother would not want to save her child from such a life? ”（170）「こんな生活から自分の子どもを救いたくない母親なんているだろうか。」と言い、母親の胸中を察する。

ここで意識したいのはCharityが子どものことを考えていて、母親の自覚が芽生えている点である。かつての彼女はいざとなれば「山」に行けば良いという考えを持っていた。しかし妊娠したことをきっかけに「山」に来てみるとその考えは変化した。自分の母親が置かれていた惨状を前に、このような場所で自分の子どもを育てることはできないと感じているのだ。さらに夜が明けて改めて現実と向き合い母親として子供のことを考えた時、“her imagination moved more soberly”（172）「より冷静な想像力が働」いて「山」にはいられないと気づいた。

だがCharityには「山」以外に行くあてがない。この八方塞がりと言える状況を救うのは、Charityが離れたいと願っていたMr. Royallである。彼はCharityが「山」に残っていることを知って馬を走らせて駆けつけたのだ。

> As he spoke it occurred to her for the first time that to reach the top of the Mountain so early he must have left North Dormer at the coldest hour of the night, and have travelled steadily but for the halt at Hamblin; and she felt a softness at her heart which no act of his had ever produced since he had brought her the Crimson Rambler because she had given up boarding-school to stay with him.（174）
>
> 彼がそう（ハンブリンで休んだ以外はずっと馬を走らせてきたと）言ったのを聞いて初めて、「山」の頂上にこんなにも早く着くには夜の最も寒い時間にノースドーマーを出発したに違いないし、ハンブリンで休んだ以外はずっと走ってきたに違いないと思って、心に温かいものを感じた。寄宿学校に入らず共に暮らす決心をした時に、ロイヤル氏がクリムゾン・ランブラー（深紅のバラ）を買ってくれたことがあった。その時以来彼の振る舞いでそんな感情が生まれることはなかった。

Mr. Royallが自分のためにほぼ休むことなく山を登ってきたことに気づき、Charityの心の中には“softness”「温かいもの」が生まれる。“softness”は*Oxford English Dictionary*では人の性質を表す用法として“Mildness or gentleness of character or disposition; tenderness.”という定義がある。ここから、CharityがMr. Royallに対して今までとは異なる印象を抱いたことが読み取れる。

そして彼はここで再びCharityに結婚を申し込む。Charityは断るがその理由は彼への嫌悪からではなく、Harneyとの子どもを授かっていることを秘密にしていたからである。しかし最終的にCharityは下山後、Mr. Royallと結婚する。Charityはあれほど反発していたMr. Royallと結婚したということなのだが、山口ヨシ子はこれについて「チャリティは母性への目覚めをきっかけに『よい娘』に変化している」（259）と指摘している。確かに「山」の惨状を目の当たりにしたCharityはMr. Royallに従順になっている。母親として子どもを守りたいという思いから経済的援助が確約されたMr. Royallと結婚したと捉えることも可能

である。

だがここではCharityが嫌っていたMr. Royallと結婚することが、*The Age of Innocence*の最終章においてNewlandがMayに救われる筋書きと重なっていると考えたい。NewlandはMayのことを無垢で何も見えていない女性と認識していたが、Dallasの話によって実はそうではなかったと知り深く感動する。CharityもMr. Royallを厭わしく思っていたが結婚後、彼と共にいることが安全だと悟る。つまり相手に対する印象が大きく変わり、それまでは好感を抱いていなかった相手に救われるのである。

さらにこの時使われている言葉にも共通点が見られる。それは“safe”「安心」である。二つの作品において筋書きに加えて言葉にも重なる部分があるということは、ここにWhartonの独自の眼差しと価値観が反映されているのではないだろうか。次章では“safe”という言葉を手掛かりにこの問いについて考えていきたい。

第3章　両作品の結末における共通点 ――“safe”「安心」とは何か――

まず“safe”の意味を検討するにあたって、各々の作品内で“safe”が使われている具体的な場面を確認する。*Summer*においてCharityがMr. Royallに“safe”を見出すのは、結婚した後である。Charityは下山後に牧師の立ち会いの元で結婚したが、式を終えホテルの部屋で横になったCharityの語りから幸せな様子は感じられない。

> She groped her way in through the darkness, […] She had never felt such smooth sheets or such light warm blankets; but the softness of the bed did not soothe her. She lay there trembling with a fear that ran through her veins like ice. “What have I done? Oh, what have I done?”（185）
>
> 彼女は手探りで暗闇の中を進んだ。（中略）（布団の中に入り）今までこんなに滑らかなシーツや温かいブランケットに触ったことはなかったが、ベッドの柔らかさが彼女を慰めることはなかった。彼女は血管の中を氷のように走る恐怖に震えながら横になっていた。「私は何をしてしまったの？ああ、私は何をしてしまったの？」

CharityはMr. Royallが「山」に迎えに来た時“softness”を感じていたが、結婚した後にもぐりこんだベッドの“softness”は何の慰めにもならず、“What have I done?”と繰り返している。この様子から、ふと冷静になりMr. Royallと結婚した事実を受け止めきれていないことが読み取れる。その後Mr. Royallが部屋に近づいて来ていることが分かるとCharityは“Suddenly she sat up and pressed her hands against her frightened heart.”（185）「突然起き上がり、恐怖を感じる心臓を押さえた。」と描かれていて、幸福や“safe”からは程遠い。

だが部屋に入り横になったMr. Royallの姿を見たCharityは次のように語り、彼に対する印象が大きく変わる。

As she continued to watch him ineffable relief stole slowly over her, relaxing her strained nerves and exhausted body. He knew, then... he knew... it was because he knew that he had married her, and that he sat there in the darkness to show her she was safe with him. A stir of something deeper than she had ever felt in thinking of him flitted through her tired brain, and cautiously, noiselessly, she let her head sink on the pillow.... (186, 傍線筆者)

眠っている彼をずっと見つめていると、こわばっていた神経や疲れ切った身体がほぐれていき、言葉に表し難い安心感がゆっくりと彼女を包んだ。そうか、彼は知っていたのだ…。彼は分かっていたのだ…。だから私と結婚したのだ。こうやって暗闇の中で座り、一緒にいれば安心だと示すことだと分かっていたのだ。彼のことを考える中でそれまで感じたことのないほどの何か深い感動が、疲れた頭をよぎった。そして彼女は注意深く音を立てずに枕に顔を埋めた…

ここで "she was safe with him"「(Charity は Mr. Royall と) 一緒にいれば安心」という言葉が現れる。Charity は自分が未婚で妊娠したことを Mr. Royall が分かっていたのだと悟り、"A stir of something deeper than she had ever felt in thinking of him"「彼のことを考える中でそれまで感じたことのない何か深い感動」を覚えるのだ。

The Age of Innocence における "safe" も、相手に対する印象が大きく変わる場面で使われている。*The Age of Innocence* では最終章において Dallas が生前の May の言葉を Newland に教える際、May の言葉に "safe" が現れる。

"Yes, the day before she died. […] She said she knew we were safe with you, and always would be, because once, when she asked you to, you'd given up the thing you most wanted." (293, 傍線筆者)

「お母さんが亡くなる前日のことですよ。(中略) お父さんといれば僕たちは安心だし、これからもずっと大丈夫だと確信していると言われました。昔お母さんが頼んだら、お父さんは一番欲しいものを諦めてくれたから、だって」

この言葉を聞いた Newland は "It seemed to take an iron band from his heart to know that, after all, some one had guessed and pitied.... And that it should have been his wife moved him indescribably." (293)「結局、自分の気持ちを推し量り同情してくれた人がいたと知ることは、心にはまった鉄輪が取り去られるようだった。そしてその人が自分の妻だったとは、言葉にならないほどの感動だった。」と語り、May が自分の気持ちを分かってくれていたことに深い感動を覚える。これまでの Newland は May に対して、オールド・ニューヨークの慣習に疑問を持たずに生きているニューヨーク社交界の象徴だという印象を抱いていたため、その決まりきった見方が一変した。

次にそれぞれの作品における "safe" の意味を考えていく。両作品における "safe" は "be safe with" という形で使われていて、誰かと一緒にいることが "safe" と捉えられていることがわかる。"safe" は *Oxford English Dictionary* において "Unhurt, uninjured, unharmed;

having escaped or been preserved from some real or apprehended danger." と説明されている。上記の定義における "real danger"「現実の危険」と "apprehended danger"「予期された危険」とは、*The Age of Innocence* においては社交界の消滅に繋がる社会の変化、*Summer* においては夫なしに子育てする困難を表していると考えられる。ここで意識したいのは May から Newland、Charity から Mr. Royall というように女性が男性に "safe"「安心」を見出しているという点である。これは一見すると、結局のところ女性は男性と一緒にいることで "safe" を得られることを意味しているようにも思える。

May と Charity は共に社会の規範に沿わざるを得なかった女性である。May は社交界の求める無垢な女性として生き、Charity は未婚で身籠るべきでないという村の風潮から逃れられなかった。このように見ると女性の不自由さが際立ち、その中で男性に対して見出した "safe" とも捉えられる。しかし男性である Newland と Mr. Royall も女性と同様に不自由だと考えられる。

例えば *Summer* の第 13 章における Mr. Royall の演説では、ノースドーマーに価値を見出すための方法として "the best way to help the places we live in is to be glad we live there." (126)「私たちが住むノースドーマーを救う最も良い方法はここに住んで幸せだと思うことだ。」と述べている。彼は "I'm glad I'm here" (126)「ここにいて嬉しい」と語るが、単純なノースドーマーへの愛着とは言えないだろう。というのも彼はかつてネトルトンで弁護士業を営んでいたが、妻のためにノースドーマーに住むことにしたという事情があるからだ。そのため第 2 章において、ネトルトンでの仕事から帰ってきた彼は "I was a damn fool ever to leave Nettleton. It was Mrs. Royall that made me do it." (17)「ネトルトンを去るなんて馬鹿なことをした、そうさせたのは妻だが。」と語っている。

さらにこの演説を聴いていた牧師の Mr. Miles は "That was a *man* talking—" (126)「あれこそ**男**の演説だ」と述べる。この言葉からは男性にも「こうあるべきだ」という型が存在していることが読み取れる。

こうした Mr. Royall に関する描写は Newland の状況にも当てはまる。妻の事情によってその社会に属さざるを得ないというのは、May の妊娠によってオールド・ニューヨークの脱出を諦めた Newland と共通し、Mr. Royall の演説が "a *man* talking" と言われている点は Newland が様々な慣習に縛られていた点と重なるだろう。

この点を踏まえると性差の観点から捉えた女性から男性に対する "safe" ではなく、各々の人間が縛られた不自由な世界の中で他者に "safe" を見出しているのではないだろうか。つまり Ellen や Harney といった新しい世界を象徴する人間に救われるのではなく、元から属している世界の人間に救いを見出すという点に Wharton の価値観が表れていると考えられる。次章ではその価値観とは具体的にどのようなものなのか論じていく。

第 4 章　“safe” に見る Wharton の眼差し

第 1 節　“safe” は保守的な価値観の表れなのか

それぞれの人間が縛られている世界において、外ではなく中の人間に “safe” を見出すという結末には、Wharton が生まれた頃のニューヨークの変容が大きく影響していると考えられる。[6] 1890 年代のアメリカでは移民の流入が増えていた。1850-60 年の間には 245 万人、1881-90 年の間には 474 万人という具合に移民の数が倍増している。さらに 1900 年頃から西欧だけでなく南・東欧からの移民も増え、同言語と同文化を前提としていたアメリカ社会は変化し始めた。その中で生まれたのが “The Melting Pot”「人種のるつぼ」という言葉である。さらに第一次世界大戦後に移民の流入は一層増え、「るつぼ」のように溶け合うことはあり得ず「サラダボウル」と呼ばれるようになった。

久我俊二は Wharton の作品について「ウォートンの視点は因習的な上流社会のあり方に批判的ではあるが、一方では、新興の金持ちの参入によって崩れていく上流社会に愛惜の念を持っているようにも感じられる。」（85）と述べている。久我は「愛惜の念」が具体的に何なのかは言及していないが、既存の社会の中に救いを見出す結末は「愛惜の念」から来ていると捉えることもできるだろう。

これらを踏まえると Wharton は社会の変化に必ずしも肯定的ではなく、保守的な価値観を持っていたと考えられる。つまり自分にとってより良い場所を求めて奮闘し新たな場所で人生を送るというよりも、自らが置かれた場所で生きるのが一番良いということである。たとえその世界が自分を縛り付けているとしても同じようにそこに生きる人が自分を救ってくれるから辛抱強く生きていくという、一種の美徳のようなものが感じられる。

だがそのような美徳を描いているのならば、なぜ Newland は 26 年後の社会で “he felt shy, old-fashioned, inadequate”（292）「自分が内気で力不足な人間と感じた」と描かれているのだろうか。もし自らが置かれた場所で生きることが良いという価値観を持っていたならば、26 年後の Newland は Dallas や社会を批判し昔のニューヨーク社交界を称賛しても良さそうである。そうではなく既存の価値観と新しい価値観の間で生きる Newland を描いた点に、単に保守的ではない Wharton 独自の眼差しがあるのではないだろうか。

第 2 節　“Roman Fever” を踏まえた Wharton 独自の眼差し

Wharton の眼差しの独自性について考えていくために、晩年に発表された短編小説 “Roman Fever”（1934）を取り上げる。この作品も *The Age of Innocence* と同様に男性中心社会に生きる女性の姿が見出せるが、同時に時代の変遷も随所に描かれている。そのため Wharton にとって時代の変化の中で生きる人物を描くことは、晩年でも取り上げるほど重要だったと考えられる。“Roman Fever” はローマの古代遺跡コロッセオを舞台に、2 人の未亡人 Mrs. Slade と Mrs. Ansley が自分たちの娘を見て昔を懐古し始めるところから物語は始まる。物語の中核を成すのは Delphin Slade という一人の男性を巡る出来事である。

若い頃の婦人たちは Delphin に思いを寄せていた。後の Mrs. Slade となる Alida は既に Delphin と婚約はしていたのだが、彼が当時 Grace（後の Mrs. Ansley）に惹かれている様子

を気にしていた。そこでAlidaはDelphinになりすましてGraceに手紙を書き、彼女をコロッセオにおびき寄せた。Garceは夜中にコロッセオに行ったことで風邪を引いてしまった。その間にAlidaはDelphinと結婚し、Mrs. Sladeとなったのである。対するGraceはMrs. Ansleyとなり、Delphinと結婚することはなかった。しかし実は彼女は手紙に返事をし、Delphinと逢瀬を遂げていた。つまりMrs. Ansley の娘BarbaraはDelphinとMrs. Ansleyの子なのである。

この事実はMrs. Sladeの嫉妬が引き金となって明らかになる。Mrs. SladeはDelphinと結婚したものの“It was a big drop from being the wife of Delphin Slade to being his widow.”(7)[7]「デルフィン・スレイドの夫人から未亡人になることは大きな転落だった。」と語り、夫の死後は退屈な日々を送っている。その中でMrs. Ansleyの魅力的な娘Barbaraのことを“half-enviously”(6)「半ばうらやんで」いる。さらにBarbaraが“the extremely eligible Campolieri”(12)「最高の相手カンポリエリの息子」と婚約することについて“What was there for her to worry about?”(12)「彼女に何の心配があるというの?」と語る。

Mrs. Sladeはこうした嫉妬心から、Delphinが手紙をくれたと思っているMrs. Ansleyに対して当時Delphinを装って手紙を書いたことを打ち明ける。Delphinがコロッセオに来たとしても結婚したのは自分であるため“I had everything”(20)「すべてを手に入れたのは私」と言う。だがMrs. Anleyは最後に“I had Barbara”(20)「私はBarbaraを手に入れた」と言い残し階段を上がっていく。結局、Mrs. Ansleyの方が一枚上手だったのである。

2人の争いには常にDelphinという男性が存在している。さらにMrs. SladeはBarbaraの婚約にも嫉妬している。この様子は「良い男性と結婚することが幸せ」という男性ありきの女性を想起させ、男性中心社会に生きる女性の強かな争いと読めるだろう。だがこの作品では時代の変化も主題となっている。以下のMrs. Sladeの発言から、コロッセオはDelphinを巡る出来事の象徴であると同時に時代の変遷の象徴にもなっていることが分かる。

> “I was just thinking,” […] “What different things Rome stands for to each generation of travelers. To our grandmothers, Roman fever; to our mothers, sentimental dangers—how we used to be guarded!—to our daughters, no more dangers than the middle of Main Street. They don't know it—but how much they're missing!”(10)
>
> 「ちょっと考えていたのだけど」(中略)「ローマは旅行に来る人の世代によって違う姿を見せるのでしょう。私たちのおばあさまの世代ならローマ熱。お母さまの世代なら誘惑の危険—私たちかつてはどんなに監視されていたことか!—そして私たちの娘たちの世代では、危険なんか何もない。まるで大通りの真ん中にいるよう。だけどそれでどんなに危険が恋しくなっていることか!」

祖母の時代はローマ熱という命に関わる病気の象徴だったが、母親の時代では色恋の象徴になっている。Mrs. Sladeは娘たちの時代は危険がないと言っているが、それは好意的には受け止められていない。他の場面でも婦人たちと娘たちが対照的に描かれている。

Her companion replied by a deprecating gesture. “Not of us individually. We must remember that. It’s just the collective modern idea of Mothers.” (4)

アンズリー婦人は異を唱える動作をした。「私たちのことだけじゃないわ。それは頭に入れておかなければなりません。あれは最近の母親の全体的なイメージなのよ。」

“the collective modern idea of Mothers”「最近の母親の全体的なイメージ」とはその前にある娘二人の会話を受けた言葉だと考えられる。“let’s leave the young things to their knitting” (3)「あの若い二人には編み物でもさせておきましょう」と Barbara が Jenny に話している。二人の会話は “After all, we haven’t left our poor parents much else to do…” (8)「結局、私たちは親になにかしてあげる時間を作れなかったから…」という言葉で終わっている。新しい時代を生きる娘たちから見た “the collective modern idea of Mothers”「最近の母親の全体的なイメージ」だと考えられ、母親像が変化していることが読み取れる。また娘たちの会話は “girlish voice” (3)「少女らしい声」“fresh laugh”「生き生きとした笑い声」(3) と表現され、若さが強調されている。こうした点から婦人たちにとって娘たちは新しい時代の象徴となっていることが分かる。

続けて Mrs. Ansley は次のように語る。

“The new system has certainly given us a good deal of time to kill; and sometimes I get tired just looking—even at this.” Her gesture was now addressed to the stupendous scene at their feet. (4)

「新しいもののおかげで、私たちは本当にたくさんの時間を潰すことになった。それにただ見てるだけじゃ飽きてしまうわ。たとえこの景色でも。」彼女の動きは、足元に広がる素晴らしい景色を指していた。

“the new system”「新しいもの」も時代が進み生活に変化がもたらされていることを示している。この言葉について平石貴樹が「電化」と訳していることに加えて “a good deal of time”「たくさんの時間」を潰す必要が生じたという点から、技術の発展によって今まで女性たちが時間を費やしてきた家事労働が大幅に減ったと考えられる。[8] ただし家事の手間や負担が省けた喜びではなくやることがなくなってしまった虚しさが感じられ、時代の変化に伴う技術の発展を肯定的には受け止めていない。

さらに、作品には描かれていないが “Roman Fever” が発表された 1930 年代は女性の社会進出が始まっていたことも意識する必要がある。1914 年から 18 年までの第 1 次世界大戦中は、戦地にいる男性の代わりに女性が国内の労働力となった。終戦を迎えると戦時中の協力の見返りとして女性参政権を求める声が上がり、1920 年にアメリカで女性が参政権を獲得したのである。作品が発表された 1934 年は依然として 2020 年代現在よりも女性への制限が根強い社会だったとしても、今後女性を取り巻く状況が変わっていくことは作者 Wharton にも予想できたのではないだろうか。

つまり婦人たちの争いは過去の価値観の中での争いとも捉えられるのだ。Mrs. Slade の夫が “her husband made his big *coup* in Wall Street” (6)「ウォール街で一儲けした」とされ

ている点から作品内の時代は大不況以前の1920年代頃と考えられ、婦人たちはまさに女性解放運動の時代に生きていた人物と言える。この先「良い男性と結婚すること」の価値が変化していくことが予想できたはずだが、二人はDelphinという男性を巡り互いに相手より優位に立とうとしている。社会の変化に直面し、その変化に追いつけない姿はNewlandと重なる。ここから、過去の価値観を称賛し変化した価値観を嘆くのではなく変化に直面しながら生きる人間に焦点を当てた点にWharton独自の眼差しが存在すると言える。

Whartonの眼差しの独自性が明らかになったところで、改めて彼女が *The Age of Innocence* において描きたかったものは何かを考えてみたい。最終章のNewlandの姿にはWhartonの眼差しを確認することができた。しかし彼が最終的にオールド・ニューヨークの「産物」であるMayに救われている点に目を向けると、結局のところ既存の価値観に救いを見出す保守性を表しているとも考えられる。ではWhartonが *The Age of Innocence* で描きたかったものは既存の価値観の肯定だと結論づけて良いのだろうか。

第3節　*The Age of Innocence* で描きたかったものは何か

Whartonが *The Age of Innocence* で描いているものを明らかにするためには改めて "safe" に着目する必要がある。"safe" とは各々の人間が縛られた世界において見出されたものだということは以前に述べた。この点から *The Age of Innocence* における "safe" とは最後まで "innocence" を体現する女性として生きたMayが社交界の価値観から抜け出しきれなかったNewlandに見出したものだと言える。

MayがNewlandと一緒にいることを "safe" と見なしたのはなぜか考えてみると、彼女もNewlandと同様にオールド・ニューヨークが消滅することを分かっていたからであろう。Newlandは亡きMayについて次のように回想し、彼女が社会の変容に全く気付いていなかったと思っている。

> This hard bright blindness had kept her immediate horizon apparently unaltered. Her incapacity to recognise change made her children conceal their views from her as Archer concealed his; […] And she had died thinking the world a good place, full of loving and harmonious households like her own, […] (287)
>
> この頑固で明るい盲目さのおかげでメイの前にある水平線には目に見えた変化はなかった。メイが変化を認識できないのでニューランドが自分の考えを彼女に隠していたように、子どもたちも自分の考えを母親に明かすことはなかった。（中略）そしてメイはこの世が自分の家庭と同じく調和のとれた家庭で満たされた、申し分のない場所だと思いながらこの世を去った。

"her immediate horizon"「目の前にある水平線」とは社会のことを指していると考えられる。NewlandはMayから妊娠の報告をされた時に彼女が全て分かっていたことを知ったはずである。しかしここでは "hard bright blindness"「頑固で明るい盲目さ」と述べ、Mayは社会が変容し始めていることに気づいていないと思っている。つまりNewlandがMayに対して何も見えていないと思っていた見方は、最後まで変わらなかったのだ。

さらにMayが亡くなりMrs. Archerと同じ墓に入ったことについて“Mrs. Archer already lay safe from the terrifying “trend” which her daughter-in-law had never even become aware of.”（287, 傍線筆者）「アーチャー夫人は義理の娘メイが気づかなかった恐ろしい『趨勢』から既に逃れて眠っていた。」と語る。ここでも“safe”が登場していることに着目するべきである。社会の変化を語るNewlandから見た“trend”「趨勢」とはオールド・ニューヨークが消滅していく社会の変容を指すと考えられる。

これらのNewlandの語りからMayはオールド・ニューヨークが消滅しつつあることに気づいていない、「盲目さ」があると思っていることが分かる。しかしそのようなMayに対する見方が間違っていたことは後にDallasが明かした遺言によって気づいたはずである。このように見ていくと、Mayが社会の変容に気づいていなかったというNewlandの見方は必ずしも正しいとは言えない。

そしてMayにとっての“safe”は社会が変化する「趨勢」から逃れることだったと考えられる。だが実際のところオールド・ニューヨークは消滅したため、「趨勢」から逃れられたわけではない。したがって“safe”とは物理的に存在する逃げ場ではなく目に見えない心の拠り所を指していると考えられる。Mayは変化する社会の中でNewlandを精神的な支えとしていて、そのことを知ったNewlandもMayを心の拠り所としながら生きていくと決めたのではないだろうか。つまり“safe”とは変化する社会に生きる上で必要なものだったのである。そしてMayとNewlandが新しい価値観を肯定できなかった点から、“safe”は社会の変化が良いものをもたらすとは限らない場合に特に求められたものだろう。

既存の価値観に拘ったり新しい価値観に対抗したりするのではなく、変化に向き合いながら生きていく現実的な人物像を描いた理由の一つにWhartonが作家として活躍した時代が挙げられる。彼女が初めて作家として商業出版を果たしたのは1899年である。1890年代のアメリカでは社会情勢を強く反映したジャーナリズム的作品が主流だった。経済発展に伴う大資本家と労働者の対立や新聞の発達が主な要因である。だがこうした作品を出版するのはStephen Crane（1871-1900）をはじめとする男性作家たちであり、女性作家が活躍するにはこうした主流から距離を置いた作品を描く必要があった。

ではどのような作品を描けば女性作家として生きていけたのだろうか。女性独自の視点としてまず挙げられるのはフェミニズム的視点であろう。21世紀現在ではAdrienne Rich（1929-2012）などがフェミニズム的観点から描いた作品は高く評価されている。しかしWhartonが生きた時代において女性作家が既存の男性中心社会を糾弾することは許されなかった。そうした社会の姿勢を象徴するのがKate Chopin（1851-1904）が発表した*The Awakening*（1899）に対する猛批判である。[9] この作品も現代においては、父権制社会の中に生きる女性の可能性を問うものとして高い評価を得ている。しかし当時は既存の社会体制への挑戦状だとして酷評された。結婚した女性が自己実現を家庭以外の場所に求めることは、女性の居場所は家庭であるとしていた当時の読者には受け入れられなかったのだ。

対するWhartonの作品は主として上流階級が舞台である。そこでは社会の上位に属する人間が描かれ、黒人など下層に属するとされる人々は描かれていない。山口はWhartonの作品において登場人物の肌の色が結末に強く影響している点を、当時の白人優越主義的意識によるものだと指摘している（259-260）。実際*Summer*の主人公Charityは浅黒い少女とし

て描かれているため、白人以外の人々を作品に登場させていても、そこには白人である Mr. Royall に救われなければならない Charity という構図が浮かぶ。これは Wharton が白人以外の存在を周縁化していたと捉えられる一方で、当時の読者層を意識していたとも考えられる。Chopin の作品への猛烈な批判や黒人差別が根強い時代の「読者」とは白人男性や既存の価値観を抱いた白人女性が中心だったのではないだろうか。

つまり Wharton が作家としての評価を得るためには白人優越主義と男性優位の価値観の中で作品を描かざるを得なかった。Newland と May のように Wharton も社会の価値観に縛られていたのである。彼女の晩年にあたる 1920 年代頃のアメリカでは女性解放運動が発展していったが、女性の地位向上はすぐに実現するものではなく 21 世紀の今日でさえも権利向上のために闘う女性がいる。[10] 既存の価値観が変化すればそれで良い方向に向かうわけではなかったのだ。

Wharton はこうした現実を冷静に見つめていたのではないだろうか。Newland が既存の価値観から解放されても羽を伸ばせない姿は、変化がすぐに良いものをもたらすわけではないという現実を物語っているように感じられるのである。その中で Newland が May に救いを見出したのは、「産物」としての May が象徴する保守的な価値観の称賛ではなく「人間」としての May を心の支えとして生きていくことを意味すると読める。これは激動の時代にどう生きるかという Wharton 自身が抱いていた問いであり、読者への問いかけでもあると捉えることができる。

これらを踏まえると、Wharton の眼差しの独自性とは変化する社会に生きる人間を描いただけでなく、社会の変容を冷静に見つめその中でどう生きるかを描いた点にある。そして *The Age of Innocence* に描かれているのは既存の価値観の肯定ではない。時代が進めば社会もより良いものになるとは限らない中でもどのように生きていくかという問いの反映である。

結論

本論では、*Summer* と "Roman Fever" を参照して、*The Age of Innocence* において Wharton が描きたかったものが何だったのかという問いについて検討した。その結果明らかになったことは次の通りである。まず Wharton 独自の眼差しとは、社会の変容を冷静に見つめそこに生きる人々の生き方を描いた点にある。そして *The Age of Innocence* には、現実の中に心の拠り所を見つけて生きていく May と Newland の姿を通して、変容する社会にどう生きるかという問いが込められている。それは彼女自身が激動の時代に生きる中で抱いた問いであり、読者への問いかけとも捉えられる。

本研究の目的は、*The Age of Innocence* を男性中心社会への批判と捉えることから脱却し、新たな読み方を提示することであった。白人男性が中心を成すアメリカ文学において女性作家は男性作家の対として捉えられ、彼女たちの作品は父権制社会への批判と解釈されることが多い。それは「男性作家」ではなく「女性作家」という表現が用いられることからも明らかである。確かに多くの女性作家が女性の可能性や抑圧される息苦しさを語り、男性優位の価値観を批判してきた。しかし彼女たちが描こうとしたものは父権制度の批判だけなの

か、改めて考えるべきである。

なぜなら本研究では、従来の上流階級出身で恵まれた女性という Wharton 像から脱却し作品そのものと彼女が生きた時代に着目したことによって、Wharton の非常に現実的で冷静な眼差しが明らかになったからである。

このような Wharton 独自の眼差しが明らかになった以上、Wharton を始めとする「女性作家」の作品を語る際に女性であることに目を向け、男性優位の価値観の批判として作品の解釈をするだけでは不十分だと言えるのではないだろうか。女性であるだけではなく、女性としてどのような時代を生きたのかという視点を持ちながら作品と向き合いたい。その視点を持つことで、男性中心社会への批判という言葉では表すことのできない、作品に込められたメッセージ —— 例えば変容する社会の中でどう生きるかという Wharton の問い —— を見出すことができるはずだ。

【注】

1　河島は語り手である青年 Newland が、May に対して魅力的な女性になってほしいと願う姿や Ellen について自分だけ別の意見を持つ煩わしさを抱く点を挙げ、Wharton の批判の目は「ニューランドが代表する当時の上流階級の男性たち全体に向けられている」（570）と指摘している。

また佐々木は Wharton が男性の視点から女性の人生を語る点を特徴として挙げ、*The Age of Innocence* を出版した頃から古き社会の慣習に批判的でありながら、過去を懐古的に捉えるようになったと述べている（92）。Wharton 自身がニューヨークの上流階級出身であるため、過ぎ去った時代を懐かしむ作品とも捉えられるのだ。

2　時代背景について、移民の流入は鷲尾、女性解放運動はカバ，ボーディンをそれぞれ参照した。

3　亀井は「三人の女性作家」という節において Wharton の他にも Willa Cather（1873-1947）と Ellen Glasgow（1874-1945）をまとめて紹介していて、「私はごく限られた作品を読んでいるだけ」（225）であり「もはや深入りしている時間もない」（225）と述べている。そのため簡単な紹介となることはある意味当然なのだろうが、読者がこの点に留意しない限り *The Age of Innocence* に対する解釈の固定化に繋がると考えられる。またこうした「深入りしない」姿勢によってこれまでの *The Age of Innocence* の解釈の固定化を招いたと批判的に捉えることもできる。

4　作品の引用は全て Edith Wharton, *The Age of Innocence*, Penguin Books, 1996. による。括弧内にページ数を記す。

5　作品の引用は全て Edith Wharton, *Summer*, Penguin Books, 1993. による。括弧内にページ数を示す。

6　移民の流入によるアメリカ社会の変容については鷲尾を参照した。

7　作品の引用は全て Edith Wharton, “Roman Fever,” *Roman Fever and Other Stories,* with an Introduction by Cynthia Griffin Wolff, Scribner, 2012, pp. 3-20. による。括弧内にページ数を記す。

8　イーディス・ホシノ・アルトバックは 1920 年には缶詰めなど調理済み食品が普及し始め、1930 年代半ばからは台所の機能性が研究され始めたと指摘している。

9　*The Awakening* 出版当時の評価と現代での評価については杉澤を参照した。

10　例えばカバ，ボーディンによると、1929 年 10 月 24 日に始まった大恐慌がただでさえ低かった女

性の賃金に輪をかけ、女性労働者が解雇される事態となった（197-98）。これは第 1 次世界大戦を機に推進された女性の社会進出が後退したことを意味する。

【引用文献】

アルトバック，イーディス・ホシノ.「家庭の変遷にみる女性像」『アメリカ女性史』イーディス・ホシノ・アルトバック著，田中寿美子・掛川トミ子・中川輝子訳，第 1 章，新潮社，1976 年，pp. 17-43.

Dawson, Melanie. “Masculine Modernity: Fathers, Sons, and Generational Absolution in Wharton’s Fiction.” *The New Edith Wharton Studies*, edited by Jennifer Haytock and Laura Rattray, Cambridge UP, 2024, pp. 202-16.

“Kaleidoscope, N., Sense b.” *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, September 2025, https://doi.org/10.1093/OED/1113301636.

亀井俊介 .「三人の女性作家」『アメリカ文学史講義 2< 全 3 巻 > ―自然と文明の争い―金めっき時代から一九二〇年代まで』第 5 章，1998 年，pp. 225-28.

カバ，ベス，ジーン・ボーディン.『われらアメリカの女たち―ドキュメント・アメリカ女性史―』宮城正枝・石田美栄訳，共栄書房，1992 年，pp. 143-217.

河島弘美.「訳者解説」『無垢の時代』ウォートン，イーディス著．河島弘美訳，岩波書店，2023 年，pp. 563-85.

久我俊二.「社会的・文化的背景と作家たち」『アメリカ文学への手がかり―アメリカ文学史新考』押谷善一郎監修，久我俊二・町田哲司・山本哲編，第 4 章 1 節，大阪図書，2004 年，pp. 81-87.

“Mould | Mold, V. (1), Sense 2.a.” *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, December 2025, https://doi.org/10.1093/OED/1073536407.

“Safe, Adj., Sense I.3.a.” *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, December 2025, https://doi.org/10.1093/OED/9667682899.

佐々木真理.「イーディス・ウォートン『無垢の時代』」『深まりゆくアメリカ文学―源流と展開』竹内理矢・山本洋平編著，22，ミネルヴァ書房，2021 年，pp. 92-93.

“Social System, N.” *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, December 2025, https://doi.org/10.1093/OED/7004313191.

“Softness, N., Sense III.10.a.” *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, December 2025, https://doi.org/10.1093/OED/1107377513.

杉澤怜維子.「ケイト・ショパン『目覚め』」『アメリカ文学への手がかり―アメリカ文学史新考』押谷善一郎監修・久我俊二・町田哲司・山本哲編，第 4 章 3 節，大阪図書，2004 年，pp. 99-105.

鷲尾友春 .「移民制限を巡る政治劇」『20 のテーマで読み解くアメリカの歴史』鷲尾友春著，第 15 章，ミネルヴァ書房，2013 年，pp. 242-60.

Wharton, Edith. *The Age of Innocence*. Penguin Books, 1996.

-----. “Roman Fever,” *Roman Fever and Other Stories*, with an Introduction by Cynthia Griffin Wolff, Scribner, 2012, pp. 3-20.

ウォートン，イーディス著.「ローマ熱」『アメリカ短編ベスト 10』平石貴樹編訳，松柏社，2016 年，pp. 113-40.

-----. *Summer*. Penguin Books, 1993.

山口ヨシ子.「イーディス・ウォートンと脱出を夢見る異端者たち―『夏』を中心に」『夏』イーディス・ウォートン著，山口ヨシ子・石井幸子訳，彩流社，2022 年，pp. 238-65.